

太陽
シリーズ

正倉院と唐朝工芸

太陽正倉院シリーズⅡ

●監修 阿部弘





正倉院と唐朝工芸

●カラー

唐朝工芸と正倉院

長廣敏雄

文房具

4

調度Ⅰ

12

西安を訪ねて

中根 寛

24

調度Ⅱ

27

正倉院の色

志村ふくみ

44

飲食器ほか

46

仏具

60

履物

66

装身具

89

楽器

94

西安旅情

102

遊戲具

104

武器

110

螺鈿箱模造が出来上るまで

北村大通

113

●本文

正倉院の唐朝工芸と唐朝風工芸

阿部 弘

67

唐朝の工芸

秋山進午

77

錦綾東西往来

太田英蔵

119

遣唐使の役割

黛 弘道

124

対談 唐朝の遺産をめぐって

小野勝年／阿部 弘

130

作品解説

阿部 弘／秋山進午

146

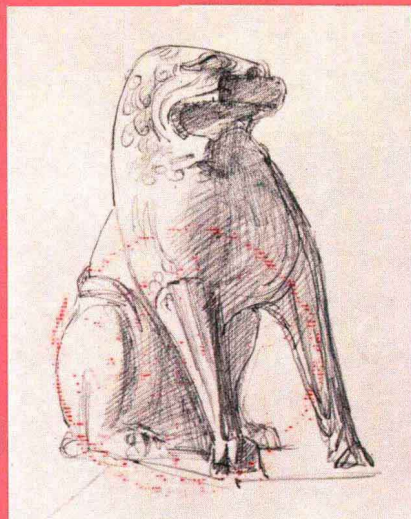
表紙・扉掲載作品解説／編集室

●表紙Ⅱ 木画紫檀琵琶 部分(正倉院宝物) ●扉Ⅱ 琵琶袋残闕 部分(正倉院宝物)

●写真Ⅱ 陳立人／田辺昭三／山中五郎／山本恭一

便利堂／(中国) 文物出版社／宮内庁正倉院事務所／奈良市役所

●編集スタッフⅡ 松本保／佐藤信二 ●レイアウトⅡ スタジオ・ギブ



◎掲載品所蔵者・編集協力

筆／青斑石硯／色麻紙／竹帙／青斑石匱合子
 沈香末塗経筒／赤漆葛箱／白葛箱／金銀絵
 木理箱／沈香木画箱／螺鈿箱／密陀絵皮箱／
 紫檀木画挟紙／紫檀小架／黒柿面厨子／花
 氈／紫檀背八角鏡／鳥獸葡萄背方鏡／金銀山
 水八卦背八角鏡／漆背金銀平脱八角鏡／平螺
 鈿背八角鏡／黄金瑠璃鈿背十二稜鏡／平螺鈿
 背四鏡／銀平脱鏡箱／銀平脱八角鏡箱／白石
 火舎／銀薰炉／紫地錦几褥／金銀花盤／銀壺
 ／二彩大平鉢／緑釉鉢／黄釉碗／三彩鉢／斑
 尾如意竹根形柄／斑尾如意紺玉柄頭／紫檀金
 鈿柄香炉／袈裟箱袋／袈裟箱／繡線鞋／三合
 鞘御刀子／刀子／金銀平文琴／螺鈿紫檀五絃
 琵琶／琵琶袋残闕／木画紫檀琵琶／紅牙撥鏝
 撥／刻彫尺八／木画紫檀基局／金銀亀甲龜／
 漆緑蓮條龜／金銀鈿柱唐大刀／紫皮最文珠玉
 飾刺繡羅帶

正倉院宝物

青銅貼銀鍍金禽獸發貌文鏡／青銅螺鈿鸞鳥宝
 相華文八花鏡／銀鍍金禽獸文脚杯／銀鍍金狩
 獵文六花脚杯／銀鍍金花鳥唐草文八曲杯／銀
 鍍金龜池鸞鳥文洗／三彩貼花鳳凰文鳳首瓶

白鶴美術館蔵

青銅迦陵頻伽文八花鏡／青銅貼銀鍍金双鳳双
 獸文八稜鏡

五島美術館蔵

青磁刻花蓮華文三足盤／黒川古文化研究所蔵
 三彩貼花唐草文長頸瓶／青磁四耳壺

東京国立博物館蔵

方格禽獸文鏡／金銀平脱天人鳳凰花鳥文八花
 鏡／金釧白玉杯／金脚杯／緑ガラス杯瓶／三

彩象竜頭蓮弁飾台付壺／三彩山池／宝相花文
 錦鞋／金珠宝象嵌頸飾

(中国)

青磁貼花鳳首瓶／黒釉青白斑文鼓胴

故宮博物院蔵

宮内庁正倉院事務所・中国文物出版社・大阪
 市立美術館・第二アートセンター

THE SUN Series No. 26

Shōsōin Series II

Shōsōin and Tang Artifacts

This series introduces the Shōsōin Treasures in Nara, Japan, which are said to be a world treasury. The series consists of four volumes and this is the second. The beauties of the artifacts of exotic shapes and patterns brought over from India, Persia, Central Asia, Arabia, and Egypt were further brightened and enhanced to the acme of refinement in the Tang Dynasty capital of Changan (now Sian). Many of those flowers of fine art which culminated under the Tang Dynasty were brought across the sea to Japan in those days, and have been preserved to this day as the Shōsōin Treasures. Here in this volume, in addition to the treasures of the Shōsōin, those preserved elsewhere and a wealth of Tang artifacts excavated recently in China are also introduced.

Brief explanations of the contents in sequence of color pages are as follow:

- * Stationery (Pp. 6 ~ 11)
including writing brushes, inkstones, and paper.
- * Furniture (Pp. 12 ~ 45)
including chests, desks, mirrors, and incense burners.
- * Tableware (Pp. 46 ~ 59)
- * Buddhism altarpieces (Pp. 60 ~ 65)
- * Personal adornments (Pp. 87 ~ 93)
- * Musical instruments (Pp. 94 ~ 101)
including zithers, guitars, and clarinets.
- * Toys and games (Pp. 104 ~ 109)
- * Arms (Pp. 110, 111)
- * Proces of making mother-of-pearl-inlaid lacquerware (Pp. 113 ~ 117)
with Daitsu Kitamura, a master japanning artist of today, at work on a replica of one of the mother-of-pearl-inlaid lacquered chests housed in the Shōsōin.

EDITOR: Tamotsu MATSUMOTO

正倉院と唐朝工芸

天賦の資

質に恵まれながら、

四面海の島々のほか依るべき

所を持たぬ日本人にとって、求めて

なお渴仰し止まぬ対象は、広い海の彼方

の未だ見ぬ国の文物ではなかったか。このこと

は昔も今も変りない。いやしかし、その度合いの激

しさに於いて、とりわけ顕著な時代の幾つかがあったこ

とを私達はすでに教えられて知っている。奈良に都のあった

時代がその一つである。

対象が余りにも魅惑的であった。正倉院に伝わる唐代の文物がそれを雄

弁に物語っている。唐朝工芸が窮めた高い境地は、到底近づき得ないほどに思え

る。しかし想像も及ばぬ辛苦の末、ようやく手にしたそれらを、日本人はただ愛玩、

讃嘆するに終始したのか。いやそうではない。それらを規範とすることにより、自らの文化

をより一層高める糧としたのである。正倉院には唐朝工芸の粹と呼ぶべき遺物の数々が見られる。

ただし唐朝風でありながら、唐代人の仕事であるとも、また日本人の作であるとも、見極め難い数多の優れ

た遺物に混ってである。正倉院はむろん唐朝工芸の精髓を理解するに欠かせぬ無二の場所である。しかしま

た同時に、日本人の豊かな資質を窺うに役立つ鍵を納めた宝庫でもある。

監修 阿部 弘

図版選 阿部 弘 秋山進午

文 長廣敏雄 中根寛 志村ふくみ 北村大通

写真 陳立人・田辺昭三・山中五郎・便利堂

(中国) 文物出版社・宮内庁正倉院事務所・奈良市役所

唐朝工芸と正倉院 長廣敏雄

多種多様な唐朝工芸の各ジャンルが、わが正倉院宝物に揃っている。このことは、一方から見ると驚異的なことだし、別の方からいえば日本のぼくたちが自慢できることなのだ。

いったい中国という国は、世界一の美術工芸の国であって、既に漢代(前三世紀末から西暦三世紀前期)に名をなしていた。唐代三百年は質の高かった漢代工芸の伝統を継糸とし、西方ペルシア・インド・中央アジアの美術流入を緯糸として、まさに東アジアでの空前の美術工芸の生産地になっていたのである。絹織物・青銅器・銅鏡・陶磁器・玉石工・漆工等々はいずれも永い中国伝統の工芸であった。それらは宏大な中国大陆の各地で生産されたが、なんといっても国都の長安(西都)と洛陽(東都)とが巨大な消費大都市であったので、最も洗練され、最も絢爛豪華な作品は朝廷直属の工場・工房がそれを製造した。唐朝は貴族社会の時代であつたし、玄宗皇帝(七一二～七五六)の開元年間まではまったく平和であり、西はトウルファン、クチャあたりまでも太平を謳歌して、美的工芸を楽しんだ。

エピソードを述べよう。正倉院宝物には銅鏡に「金銀平脱」の技法、また琴に「金銀平文」という技法(平脱と平文とは同じ)の文様が用いられた。これは金銀の薄板(箔に近い)から鳥や花の文様を切り抜き、その金銀切り抜き文様を漆工によって銅鏡や琴の表面に定着させる高度の技術である。こういう最高技術の諸種調度品や工芸品は、唐の玄宗皇帝や楊貴妃が寵臣なる安祿山にしばしば与えており、また安祿山から献上もしていることが、『西陽雜俎』(唐・段成式撰)とか『安祿山事蹟』(唐・姚汝能撰)という書物に記されている。おそらく朝廷だけでなく唐の宗室も貴族もこういう豪華品をさかんに用いたにちがいない。安祿山が反乱を起し帝都が混乱したあとに、肅宗皇帝が七五七年に、また代宗皇帝が七七二年に「平脱を含む」豪華工芸の製造・使用を勅命で禁止しているのだ。



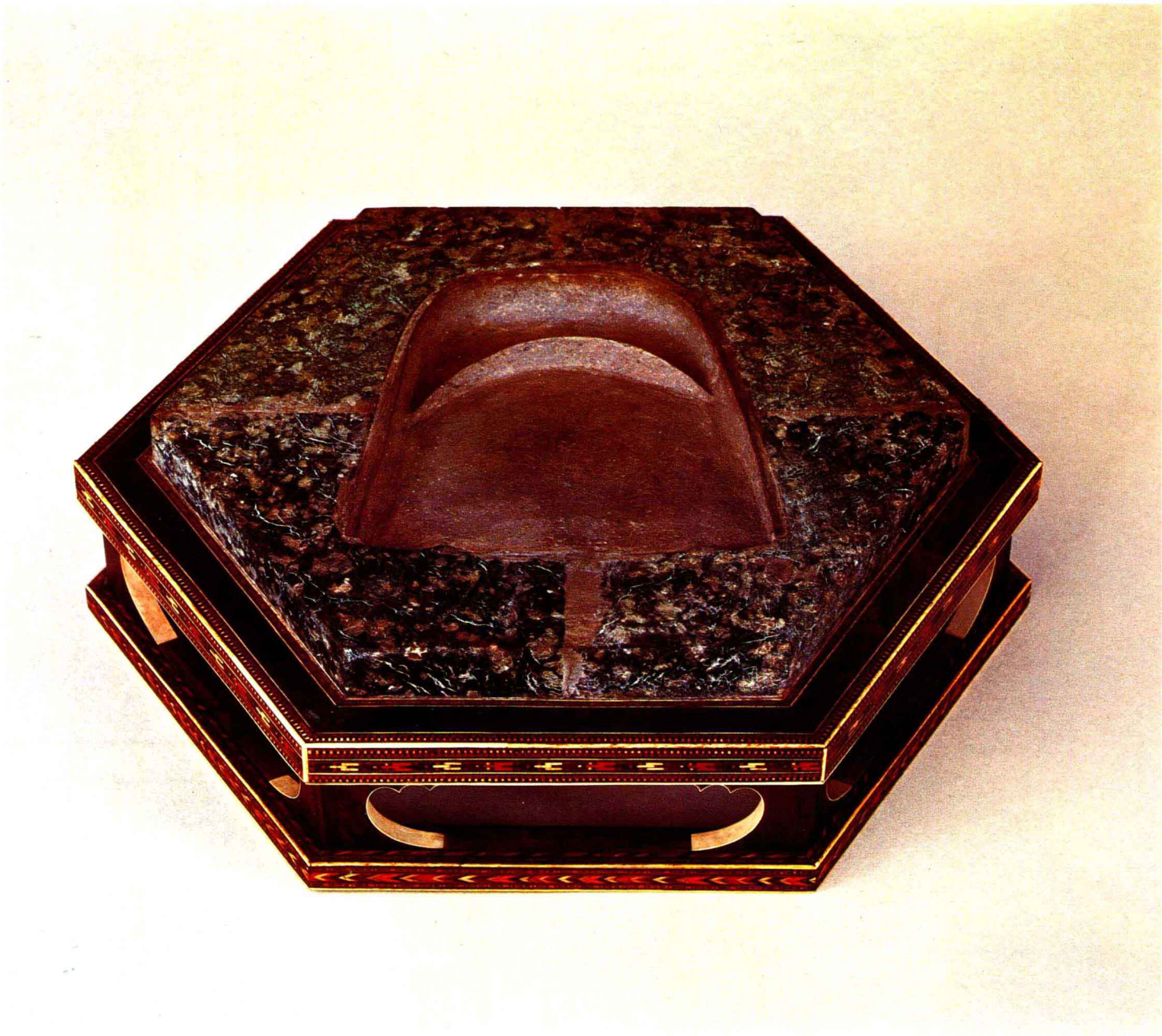
時の政府が製造・使用を禁ずるほどに、高級の美術工芸が過剰になることは、唐朝社会にとって好い傾向ではなかった。果せるかな、唐朝滅亡とともに「過剰品」が逆に壊滅し存在を消した。そういうことから、わが正倉院宝物は、在りし日の唐朝工芸を代表するといつてよい文化財的評価があたえられるのである。

一九八一年の今日では、中国大陸の発掘による唐代工芸品の発見が多くなり、伝統的中国工芸と西方伝来の移入工芸との関連が、徐々に明かになりつつある。例えば一九七〇年西安南郊何家村の唐代窖藏から金銀器、玉製品、宝石器などの多量の発見があった。また一九五一年河南鄭州出土の金銀平脱、天鳳凰花鳥文八花鏡があるなど、正倉院宝物が一つずつ唐朝作品との類似性をみいだしつつある。殊に唐朝一流品が正倉院宝物となっている。

最近では正倉院宝物とシルクロードとの関係を結びつけることが流行している。それは一面の理由があるが、盾の一面のみをみている嫌いがある。さきにもいったように、中国伝統工芸の技術と芸術内容を熟視していないことにそれは基づく。むろん隋唐時代の異常なまでの西域文明の東流が中国文化全般にかなりの変動をあたえたことは否めない。唐代工芸全般に色彩的でオペテッシュ(光学的。金銀尊重)な、総じて感覚的なデザインが濃化したといえるだろう。漢魏美術やのちの宋元美術には沈静的で礼制的な規律がある。唐の工芸はしかし一方では感覚開放的とみえながら、一方では中国特有な雅正の美をデザインのなかに浸透させている。例えば正倉院宝物の金銀山水八卦背八角鏡、槃龍背八角鏡がそうだし、黄金瑠璃鈿背十二稜鏡のごときは一見きわめて色彩的ではありながら、大小花弁六枚の簡素で厳正な構成をしめす。例をあげればまだいくつもあるが、要するに格法や格調の美学を基礎とする唐朝は西域流入の感覚美のデザインをそれとみごとに調和させたのであった。わが正倉院宝物には日本製のものもかなりあることは疑いないし、そういう点では、唐朝工芸とまったく同一とみることは正しくない。ぼく自身は或る種の本製品に色彩の美しさを感銘はするものの、どこかに弱々しさを認めざるをえない。大陸と日本は同質文化ではないからである。



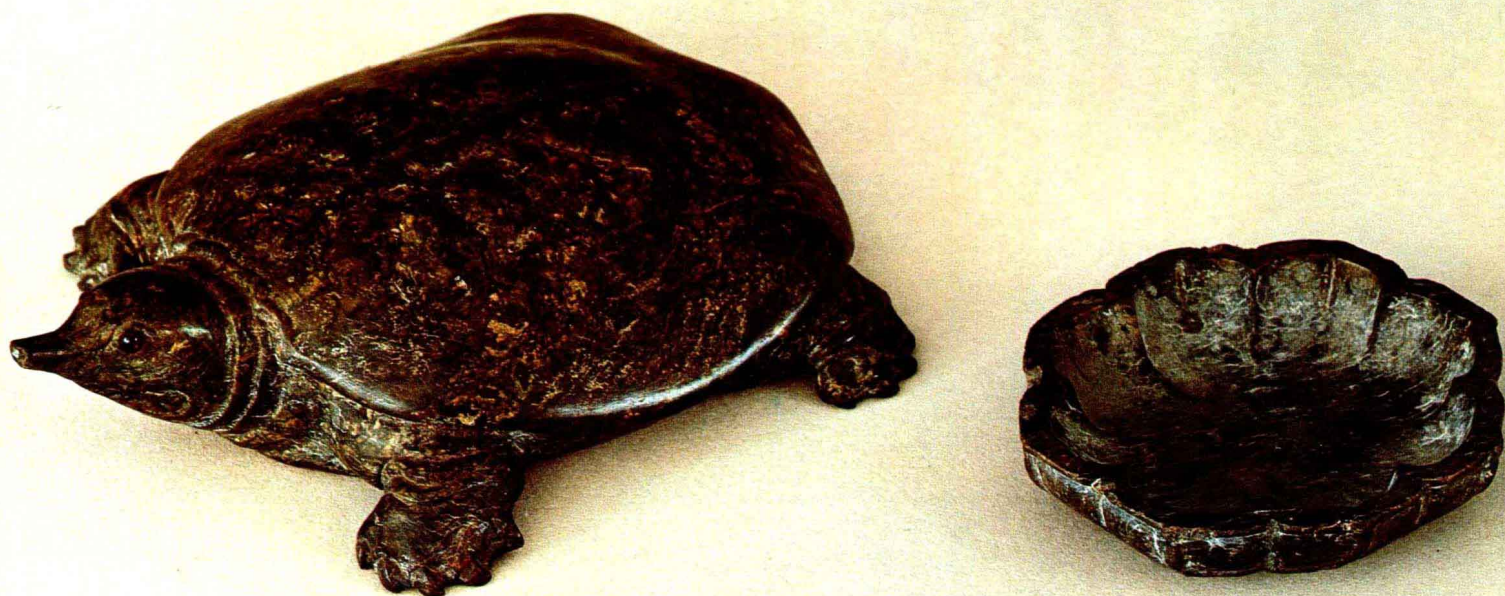




青斑石硯 正倉院宝物



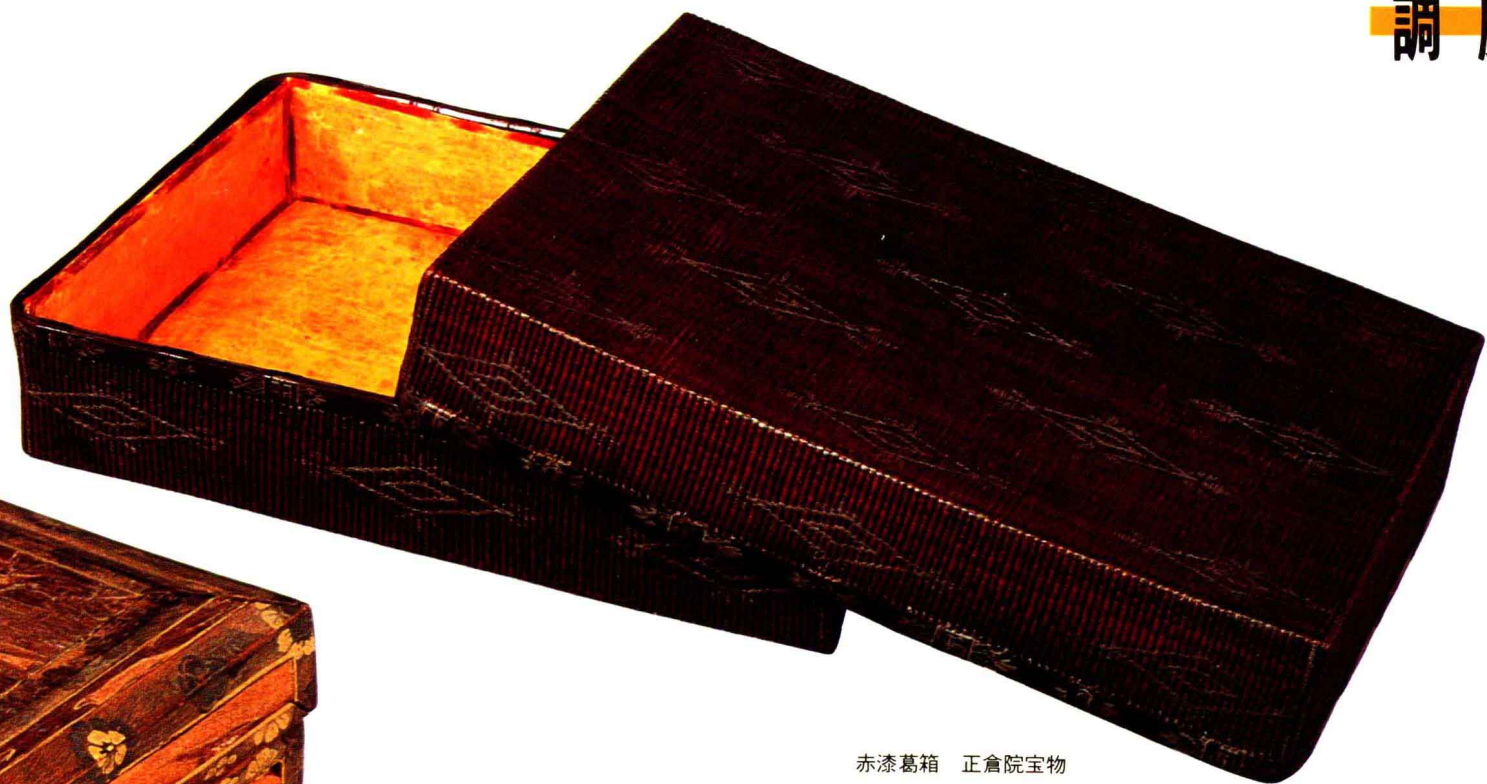




青斑石龜合子 正倉院宝物

◀ 沉香末塗經筒 正倉院宝物





赤漆葛箱 正倉院宝物



白葛箱 正倉院宝物



金銀絵木理箱 正倉院宝物







螺鈿箱蓋表 正倉院宝物